

茨城県常陸大宮市
鷹巣原遺跡
発掘調査報告書



掘立柱建物跡 S-B01出土銭貨

平成19年3月
常陸大宮市教育委員会
株エヌ・ティ・ティ・ドコモ
有限会社 日考研茨城

茨城県常陸大宮市

鷹巣原遺跡

発掘調査報告書

平成19年3月
常陸大宮市教育委員会
(株)エヌ・ティ・ティ・ドコモ
有限会社 日考研茨城

ごあいさつ

常陸大宮市大宮地域は茨城県の北部に位置し、久慈川と那珂川に挟まれ、全体的に北部が高く、南部が低い傾斜をした丘陵地を形成しております。この二大河川の沿岸には、肥沃な土地が開け、豊かな自然に恵まれ古くから人々の生活の場となり、多くの歴史を重ねております。そのためこの地域には、古墳・塚・集落跡などが数多くの遺跡が存在しております。これらの遺跡は当時の様子を知る手がかりとなることはもちろんのこと、現代の私たちが豊かに生活をすることができる先人の業績もあります。

この様な貴重な文化遺産を後世に伝えることは、私たちの任務であり、郷土の発展のためにも貴重なことと考えております。

このたびの調査は、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモの移動通信用基地局建設工事に伴い、周知の遺跡である鹿島原遺跡の発掘調査による記録保存を目的に行ったものであります。遺跡内からは奈良・平安時代の掘立柱建物跡、銅鏡、土坑等が多數検出されました。この報告書によって、地域の祖先の遺業をしのぶことができるとともに、文化財に対する認識がいっそう深まり、遺跡愛護の精神や郷土の文化を培う上で貴重な資料として役立てていただければ幸いであります。

最後になりましたが、発掘調査にあたり格別のご指導を賜りました茨城県埋蔵文化財指導員川崎純徳先生、そしてご協力いただきました地元の関係者、また、調査経費についてご協力いただいた株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ様各位に心から厚く感謝を申し上げます。

平成19年3月

茨城県常陸大宮市教育委員会

例　　言

1. 本書は、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモの委託を受けて、常陸大宮市教育委員会の指導のもと、有限会社日考研茨城が行った、鉄塔建設に伴う記録保存を目的とした発掘調査報告書である。
2. 本書は、下記の遺跡を収録したものである。
本調査　鷺巣原（たかすはら）遺跡　常陸大宮市鷺巣字原1363-1
3. 発掘調査は、下記の期間に実施した。
平成18年6月1日～6月6日
4. 発掘調査組織は下記の通りである。

調査担当者	小川 和博〔(有)日考研茨城〕	現地・整埋
	大渕 淳志〔(有)日考研茨城〕	現地・整理
調査員	遠藤 啓子〔(有)日考研茨城〕	現地・整理
	井澤良忠、井澤しつい、菊池等、佐藤寛、塙澤和紀、相田三郎、 沢田すみ江、川崎東功	現地調査作業員
	整理調査作業員	大渕由紀子・大野美佳〔以上(有)日考研茨城〕
事務局	(有)日考研茨城	
調査指導	常陸大宮市教育委員会生涯学習課	
5. 本書の編集執筆は、小川和博、大渕淳志が行った。
6. 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
7. 遺構の略称に使用した記号は以下の通りである。

掘立柱建物跡	SB	土坑	SK	撓乱	K	旧石器時代調査地点	P
--------	----	----	----	----	---	-----------	---
8. 本書中の色調に関する表現は新版標準土色帖（農林水産技術会議事務局監修2000年版）に従った。
9. 遺構および遺物の写真撮影は大渕淳志・小川和博が行った。
10. 記録および出土遺物は、常陸大宮市教育委員会が保管している。
11. 発掘調査および報告書の作成に当たり、以下の方々のご教示・ご高配を賜った。記して、深く謝意を表す次第です。（敬称略・順不同）
茨城県教育委員会、（財）茨城県教育財団、土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場、
川崎純徳 比毛竜男

本文目次

ごあいさつ

例言

第Ⅰ章 序章	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過とその概要	1
第3節 調査日誌	1
第4節 遺跡の位置と周辺遺跡	2
1. 遺跡の位置	2
2. 周辺の遺跡	2
第Ⅱ章 検出された遺構と遺物	7
第1節 概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 掘立柱建物跡	8
1) 掘立柱建物跡SB01	8
第4節 土坑	9
1) 土坑SK01	9
2) 土坑SK02	11
3) 土坑SK03	11
4) 土坑SK04	11
5) 土坑SK05	11
第5節 柱穴状遺構	12
1) 柱穴状遺構(ピット)P1	12
第Ⅲ章 まとめ	13

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第2図	鷹巣原遺跡周辺地形図	4
第3図	鷹巣原遺跡遺構配置図	5
第4図	鷹巣原遺跡基本層序	7
第5図	掘立柱建物跡S B01実測図	9
第6図	土坑SK01～05、柱穴状遺構（P-1）実測図	10
第7図	土坑および掘立柱建物跡S B01出土遺物	12

写真図版目次

PL.1	遺跡遠景、調査区終了全景、基本層序（PG1）
PL.2	掘立柱建物跡S B01全景、掘立柱建物跡S B01全景、掘立柱建物跡S B01 P2（左） 土坑SK03（右）セクション
PL.3	土坑SK01（上）SK02（下）全景、土坑SK03全景、土坑SK04全景
PL.4	土坑SK05全景、錢貨出土状況、土坑SK01・05および掘立柱建物跡S B01出土遺物

表目次

表1	鷹巣原遺跡と周辺遺跡一覧
表2	錢貨計測表

第1章 序 章

第1節 調査に至る経緯

鷹巣原遺跡は、久慈川に沿って南にのびる標高50~60m、水田面から比高約5~10mの中位段丘の畑一帯にあります。

昭和56年9月に大宮町上地開発公社住宅団地の建設に伴い、一時調査が行われ昭和61年11月に二次調査が行われ、土器片や瓦片などが発見され、また西方斜面には瓦窓も付属し、単純な集落遺跡のみではなく工人関係集落も予想される重要な注目すべき遺跡でもあります。

この度、当該地に株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモの移動通信用基地局建設の計画があり、そのため主導者である株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモから常陸大宮市教育委員会に埋蔵文化財の所在の有無の照会があり、これに基づき教育委員会は平成18年3月に試掘調査を県埋蔵文化財指導員川崎純徳先生に依頼し、建設予定地となっている区域を試掘トレンチを設定し実施したところ、各トレンチから奈良・平安時代の遺構と遺物が多数確認され、その後茨城県教育委員会との協議により、鉄塔部分について本調査することとなり、(有)日考研茨城に調査依頼を行う。承諾後教育委員会、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ及び(有)日考研茨城との三者協議を行い、建設予定地のうち鉄塔部分について本調査を平成18年6月1日から平成18年6月6日までの6日間実施した。

(常陸大宮市教育委員会)

第2節 調査経過とその概要

鷹巣原遺跡の本調査は、平成18年6月1日から6月6日まで実施した。調査は確認調査の結果に基づき、開発予定地の全域72m²を調査することとなった。

まず重機による表土除去から開始し、遺構確認のための精査を人力により行う。確認調査で把握されていた黒色土の落ち込み部を中心に丁寧な精査を繰り返し、その結果、調査区西側を中心に土坑および柱穴状遺構の黒色土の落ち込みを確認する。円形および長方形土坑4基、柱穴状遺構5本であった。さらに東側を精査すると4本の柱穴状遺構であった。これら柱穴状遺構は欠落柱穴があるものの2間×3間の掘立柱建物跡であることが判明し、SB01と命名した。しかも中央東寄りから開元通寶をはじめ4枚の銭貨が出土した。当初六道錢とみたが、掘り込みもなく掘立柱建物跡にともなう銭貨ではないかと推定した。また土坑5基はSK01~05と命名し、土坑SK01から土師器・甕の胴部破片、土坑SK05から灰釉皿破片、土師器・杯、甕の破片、さらに須恵器・甕破片が出土している。しかし、残り3基の土坑からは遺物の出土ではなく、近世以降の土坑とした。なお調査区南東コーナーに旧石器文化層を確認するための深掘グリッドP G01を設定し調査を実施するが、明確な旧石器文化層を検出できず、基本層序のみの確認となった。最終的には掘立柱建物跡1棟と土坑5基および柱穴状遺構1本を調査し完了する。

(小川和博)

第3節 調査日誌

2006年6月1日~6月6日

- 6・1 本日より調査開始。重機による表土層除去作業。遺構検出のための精査作業。掘立柱建物跡(SB01)、土坑(SK01~05)を検出する。
- 6・2 掘立柱建物跡および土坑のセクション写真撮影・実測・平面図作成全調査。
- 6・5 旧石器時代確認調査。
- 6・6 旧石器時代確認グリッド実測作業。本日にてすべての調査を完了する。

(大瀬淳志・小川和博)

第4節 遺跡の位置と周辺遺跡

1. 遺跡の位置（第1・2図）

遺跡は、北緯 $36^{\circ} 33' 46''$ E、東経 $140^{\circ} 23' 24''$ の茨城県北部、常陸大宮市鷹巣字原1363-1に所在する。ここは水郡線常陸大宮駅北2km、国道118号線に接し、市街地の北端に位置する。付近の台地は八溝山系から延びた丘陵の一部が北から西側に突出した洪積世の台地が形成され、東に久慈川、西に那珂川によって大きく分断され、さらに市街地西に流れる玉川によって三分される。遺跡の立地する通称大宮台地は久慈川と玉川に挟まれた南北に細長く延びた舌状台地で、久慈川と玉川が下岩瀬付近で合流することによって収束する。こうした大宮台地は両河川の支流によってさらに侵食され複雑な地形を呈している。遺跡は東に流れる久慈川の右岸で、直接影響を受け、より開拓された複雑で比較的幅狭い支谷に面しているが、概して台地は南北に延びる平坦な舌状台地である。標高は61m、東側の谷津田との比高差は約38mを測る。調査前の現況は果樹園で、遺跡南側は鷹巣原住宅としてすでに大規模に宅地化されている。なお、遺跡名はすでに「鷹巣遺跡」として周知されているが、ここでは平成12年の埋蔵文化財包蔵地調査により「鷹巣原(たかすはら)遺跡」とする。

2. 周辺の遺跡（第1図）

鷹巣原遺跡が立地する常陸大宮市は東に久慈川、西に那珂川と県内を代表する主要河川に挟まれ、さらに中央には玉川が流れ、県北においては海岸地帯以上に水利に恵まれた稀にみる肥沃な環境を呈していたことを示している。そのためか旧石器時代から中近世に至るまで多くの遺跡が周知されており、各時期それぞれ学的に古くから注目されている遺跡が多いのも特徴である。いま時期ごとに主な遺跡を例挙してみても、旧石器時代の梶巾遺跡、縄文時代の坪井上遺跡、高ノ倉遺跡。弥生時代の小野天神前遺跡、上岩瀬富士山遺跡、小祝梶巾遺跡。古墳時代の下村田一騎山古墳や糠塚古墳。奈良・平安時代の小野源氏平遺跡や鷹巣遺跡等が知られている。これらはいずれも県内の歴史を語るとき必ず代表的な遺跡のひとつとして挙げられ、しかも全体的にみていずれも数少ない発掘調査によって明らかにされた成果であり、逆にみると市内などの遺跡の調査を実施しても注目度の高い成果が期待できることを示唆している。

こそ鷹巣原遺跡でも過去3次にわたる調査が行われ、例にもれず多くの成果を挙げている。まず第1次調査は昭和56年工場建設に伴い5,000m²を対象に実施された。本調査区の南東100mの位置にある。年代は9世紀前半から中葉の堅穴住居跡15軒が検出された。そのほか掘立柱建物跡2棟、柱穴列の伴う清状遺構1条が調査されている。各住居跡からは多数の土師器、須恵器と伴に「常陸国風土記」久慈郡の記事にも関連すると推定されている土製、石製、鉄製鋤鎌車が出土している。引き続く第2次調査は隣接する地点15,000m²を昭和61年に実施している。新たに堅穴住居跡23軒が検出された。なかでも調査区西側の2軒からは布目瓦が多量に出土し、瓦窯跡との関連が指摘されている。さらに平成2、3年には鷹巣遺跡隣接地として試掘調査が実施されている。あいにく土師器等の遺物の出土はあったものの、遺構は確認できていない。こうした第1、2次調査において明らかにされた鷹巣遺跡からわずか100mの隣接地「鷹巣原遺跡」が今回の調査対象地となった。ここで最も当然瓦工房等を伴う集落跡の広がりが予想されたが、あいにく今回の調査では堅穴住居跡等の遺構や遺物からは確認できなかったものの、少なくとも中世段階の掘立柱建物跡や土坑の検出はある意味で貴重な発見であった。なお、本遺跡は第1・2次調査において遺跡名が「鷹巣遺跡」となっているが、県および市の遺跡分布地図においては「鷹巣原遺跡」となっており、それを準拠しておきたい。

さて、ここで本遺跡周辺遺跡の概要について、すでに市教育委員会で報告されている分布調査に基づき簡単に触れておきたい。まず旧石器時代の遺跡については「梶巾遺跡(007)」で調査され、槍先形尖頭器が出土し、「小野天神前遺跡」でも組石核が採集されている。そのほか市内最古といわれている「小野高ノ倉遺跡」および上坪遺跡(033)、鷹巣戸内遺跡(034)が知られている。次ぎの縄文時代になると急に遺跡数が増えてくる。周辺では昭和51、58年に調査された「梶巾遺跡(007)」をはじめ、「諫訪台遺跡(050)」「宮中遺跡(011)」「富士山遺跡(003)」等21遺



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:25,000)

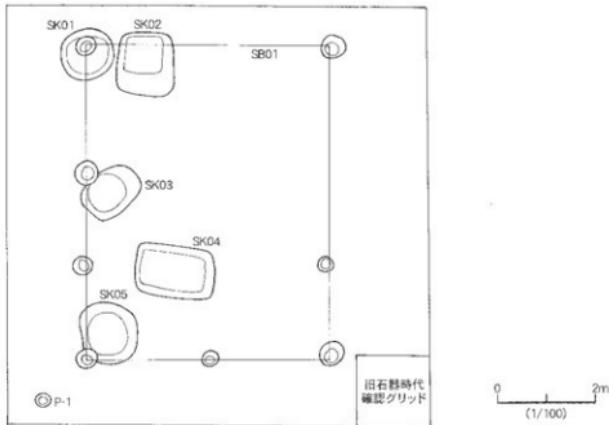


跡が知られ、また正式な調査は行われていないが、「河井台遺跡(096)」では多量の石鐵が採集されている。そのほか中期の大集落として確認された「坪井上遺跡」「高ノ倉遺跡」があり、绳文早期・中期から弥生時代に営まれた「小野天神前遺跡」は、主となる晚期段階で土偶や亀形土製品をはじめ石劍、石棒、独鈷石等祭祀具が多数出土している。そして当遺跡は県内でも数少ない弥生時代中期前半まで継続され、市内に限らず県内を代表する遺跡のひとつとなっている。そのほか周辺地域では、後期の「富士山遺跡(003)」や「幌巾遺跡(003)」が著名である。以上のほか弥生時代の遺跡は確実ではものが多い。

古墳時代では須恵器や形象埴輪を含めた豊富な埴輪の出土が知られている「鷹巣古墳群(023)」のほか、前方後方墳である「富士山4号墳」は墳長38mを測り、県内でも最古の古墳のひとつとして周知されている。また「糠塚古墳(022)」は80mの大形古墳である。また集落跡も数は少ないが報告されている。「幌巾遺跡(007)」では前・中期の住居跡が検出されている。さらに玉川左岸には「雷神山横穴群(091)」と「岩欠横穴群(139)」があり、いずれも5基ずつ確認されている。次ぎの奈良・平安時代の遺跡は全体的に多く、本遺跡と同一遺跡となる「鷹巣(原)遺跡(010)」では8世紀中葉から10世紀にかけて32軒の住居跡が確認されている。さらに隣接して「鷹巣瓦窯跡(042)」が知られており、ここで焼かれた瓦が住居跡のカマド構成材として利用されていた。そのほか最近調査された「上宿上坪遺跡(094)」や「上坪遺跡(033)」では明確な集落跡として注目されている。最後に中世では城跡として「宇留野城跡(038)」や「菅又城跡(100)」が知られているが、先に調査した「上宿上坪遺跡(094)」では明瞭な船跡は確認できなかったが、溝や土坑から古漁戸の平碗・茶壺、志戸呂の擂鉢、常滑の甕や内耳土器、さらに硯の出土が報告されている。またすでに湮滅してしまったが「唐木田二ツ塚(109)」では近世の塚群が確認されている。

(小川和博)

①



第3図 鷹巣原遺跡遺構配図図

表1 鷹巣原遺跡と周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代・時期	備考
010	鷹巣原遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	昭和56・59年調査
003	富士山遺跡	集落跡	縄文	
007	絨巾遺跡	集落跡	旧石器、縄文、奈良・平安	昭和51・58年調査
008	閑平遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	
011	宮中遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	平成3年調査
018	菅又八田遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	
022	糠塚古墳群	古墳群	古墳	小祝糠塚古墳群指定
023	鷹巣古墳群	古墳群	古墳	
024	松吟寺古墳	古墳	古墳	墓地
025	権現山上地遺跡	包蔵地	古墳	
032	宿東遺跡	集落跡	弥生、古墳、奈良・平安	
033	上坪遺跡	集落跡	旧石器、縄文、奈良・平安	
034	轟崖戸内遺跡	集落跡	旧石器、縄文、奈良・平安	旧名、鷹巣遺跡
038	宇留野城跡	城館跡	中世	
042	鷹巣瓦窯跡	瓦窯跡	奈良・平安	
049	三越遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	
050	御訪台遺跡	集落跡	縄文	平成3年調査
051	大阪平B遺跡	集落跡	奈良・平安	
052	向山遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	
054	北平遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良・平安	
060	大追遺跡	集落跡	縄文	
061	糠塚遺跡	包蔵地	弥生、奈良・平安	
065	挂ヶ台遺跡	集落跡	古墳、奈良・平安	
075	熊の石遺跡	集落跡	奈良・平安	
076	額山A遺跡	集落跡	奈良・平安	
077	額山B遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	
078	大阪平A遺跡	集落跡	奈良・平安	
079	姥賀遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	
082	鷹巣原B遺跡	集落跡	奈良・平安、中世	
083	西沢遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	
084	中丸遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	
086	前坪遺跡	集落跡	古墳、奈良・平安、中世	
088	馬場先遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良・平安	
090	大塚遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	
091	雷神山横穴群	横穴群	古墳	5基市指定
092	挂ヶ台古墳	古墳	古墳	
094	上宿上坪遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良・平安	平成15年調査
096	河井台遺跡	集落跡	奈良・平安	
097	田子内遺跡	集落跡	奈良・平安	
099	見波遺跡	集落跡	奈良・平安、中世	
100	菅又館跡	城館跡	中世	
108	前坪東遺跡	集落跡	縄文、近世	
109	唐木田二ツ塚	塚群	近世	遷減
118	仲下遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良・平安、中世	
119	萩木所遺跡	集落跡	奈良・平安	
123	上高作遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	
124	六丁遺跡	集落跡	奈良・平安	
125	御訪下遺跡	集落跡	縄文	
126	京塚遺跡	集落跡	弥生、奈良・平安	
131	高渡遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	
132	姥賀東遺跡	集落跡	古墳、奈良・平安	
139	岩瀬横穴墓群	横穴群	古墳	
143	八田向原遺跡	集落跡	中世	

第Ⅱ章 検出された遺構と遺物

第1節 概要（第3図）

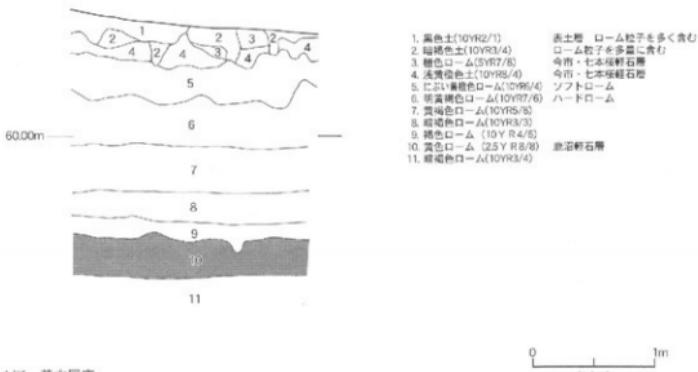
鷹巣原遺跡は、常陸大宮市の中央東端、久慈川右岸の標高約61mの台地上に所在する。ここは東側に流れる久慈川を眼下に眺め、比高差は36mを越える高台に位置し、南側に突出した舌状台地であるが平坦面が比較的広範囲に広がる段丘上で、西側の山寄りは標高90mの高位面が後背地となっている。なお、昭和56、59年に隣接する地点が発掘調査され、鷹巣瓦窯跡群と密接に関連する集落跡として注目されていた遺跡であり、今回の調査でもその集落跡の存在が期待された。しかし、以前調査された地点に隣接しているとはいえ、鉄塔建設という限られた範囲であるため、台地縁辺部の調査であったが住居跡は検出できず、集落跡の限界はここでは確認できなかった。なお、現状は果樹園であった。

今回の調査は確認調査の結果に基づき、開発対象区域の全面調査となり、その面積は72m²で、ここから中世の掘立柱建物跡1棟と古代から近世以降の土坑5基、柱穴状遺構1本が検出された。

第2節 基本層序（第4図）

今回の調査で、旧石器時代に係る文化層を確認するために、深掘調査を実施した。遺構の希薄である調査区南東隅に2×2mのグリッドを設定して調査した。あいにく明確な旧石器文化層や遺物は検出できなかったものの、市内の資料蓄積としてローム層の調査を行い、今後の調査の資料に供したい。設定した地点は台地縁辺に近い平坦部である。ここでの鍛層は3層の今市・七本桜軽石層と10層の鹿沼軽石層堆積層である。

- 1層 黒色土層(10YR2/1) 表土層。耕作土である。ローム粒子を多く含む。締りがなく、粘性に欠ける。
- 2層 暗褐色土層(10YR3/4) ローム粒子を多量に含む。締りがあり、粘性は普通である。
- 3層 橙色土層(5 YR7/8) 今市・七本桜軽石層。白色粒子を微量ふくみ、締まりにやや欠け、粘性に欠ける。
- 4層 浅黄褐色土層(10YR8/4) 今市・七本桜軽石層下部。ローム粒子や白色粒子を微量含む。締まりにやや欠け、粘性に欠ける
- 5層 にぶい黄褐色ローム層(10YR6/4) ソフトロームである。軟弱である。層厚は5~30cm前後と幅がある。締りにやや欠け、粘性は普通である。
- 6層 明黄褐色ローム層(10YR7/6) やや明るいハードローム層。堅致で締りがある。層厚は50cm前後を最大層厚とする。



第4図 基本層序

- 7層 黄褐色ローム層(10YR3/1) ハードローム層。締りがある。層厚は35cm前後を測る。黒色粒子・白色粒子を少量含む。
- 8層 暗褐色ローム層(10YR8/8) 全体的に暗いハードローム層で、第2黑色帯に相当するものと思われる。締りがある。層厚は20cm前後を測る。
- 9層 褐色ローム層(10YR4/6) 上層よりも明るいが全体的に暗いハードローム層。締りがある。層厚は30cm前後としっかりした層位を示す。黒色粒子・白色粒子を少量、赤色粒子を微量含む。
- 10層 黄色軽石層(10YR3/3) 鹿沼軽石層。締りがあり、粘性が強い。層厚は30cm前後としっかりした層位を示す。白色粒子を少量含む。
- 11層 暗褐色ローム層(10YR3/3) 締りがあり、粘性が強い。しっかりした層位を示す。白色粒子を少量含む。
検出された遺構はいずれも第3層の上面で確認されている。

(小川和博)

第3節 堀立柱建物跡

S B 0 1 (第5図)

堀立柱建物跡S B 01は、調査区のほぼ全体を範囲する位置に所在する。立地する標高は60.60m前後を測る。柱間は桁行3間、梁行2間で、桁行方向は調査区と一致し、南北を主軸にN-20°-Wをとり、やや西側に傾いている。規模は6.84×5.60mを測るもの、東側の桁行列と北側の梁行列でそれぞれ1本ずつ柱穴が確認できていないが、南北棟の建物跡として把握した。柱間寸法は西列で北側P 1・P 2間が2.60m、P 2・P 3間が2.00m、P 3・P 4間が1.72mである。また南列西側からP 4・P 5間2.50m、P 5・P 6間が2.50mである。東列南側からP 6・P 7間2.00mを有し、P 7からP 8は4.40mも離れており、その間が抜けているものと推定される。さらに北列のP 1・P 8間も5.00mとなり、やはり中間で1本抜けているものと思われる。なお柱穴掘形の形状はいずれも円形もしくは楕円形を呈し、上端径41.0~67.0cm、下端径7.0~42.0cm、深さ37.0~54.0cmを計測する。以下柱穴計測値(単位cm)を記す。

	長径	×	短径	深さ		長径	×	短径	深さ
P 1	60.0		48.0	45.0		P 2	57.0	50.0	53.0
P 3	54.0		41.0	37.0		P 4	67.0	50.0	42.5
P 5	41.0		38.0	48.0		P 6	52.0	49.0	46.0
P 7	51.0		49.0	43.0		P 8	62.0	52.0	54.0

遺物として、建物跡中央東側で3種4枚の銅錢が重ねて出土した。当初墓壙に伴うものとみていたが、墓壙としての掘形はなく、人骨をはじめ副葬品等の痕跡はまったく確認できなかったため、本跡に伴うものと判断した。これらは錢差にさし貫かれたものではなく、人為的に重ねて置かれたもので、いずれも北宋錢である。第7図6・7は開元通寶。鑄上がりは比較的良好で、とくに6は銅質も良質である。8は元祐通寶、1086年初鑄。9は聖宋元寶で1101年初鑄である。錢貨の各部測点については『平城宮発掘調査報告VI』奈良国立文化財研究所1974を参考とした。

表2 錢貨計測表(単位cm)

図番号	銭種	重量	外縁外径	内郭外径	内縁内径	内郭内径	外縁厚	初鑄年代・元号
第7図	(g)	平均G	平均N	平均g	平均n	平均T		
6	開元通寶	2.24	23.97	19.60	7.81	7.12	0.95	北宋(960年)
7	開元通寶	2.96	23.63	20.19	8.01	6.65	1.20	北宋(960年)
8	元祐通寶	3.24	24.24	20.68	8.53	7.25	1.19	北宋(1086年)
9	聖宋元寶	3.52	24.28	19.87	7.82	6.82	1.19	北宋(1101年)

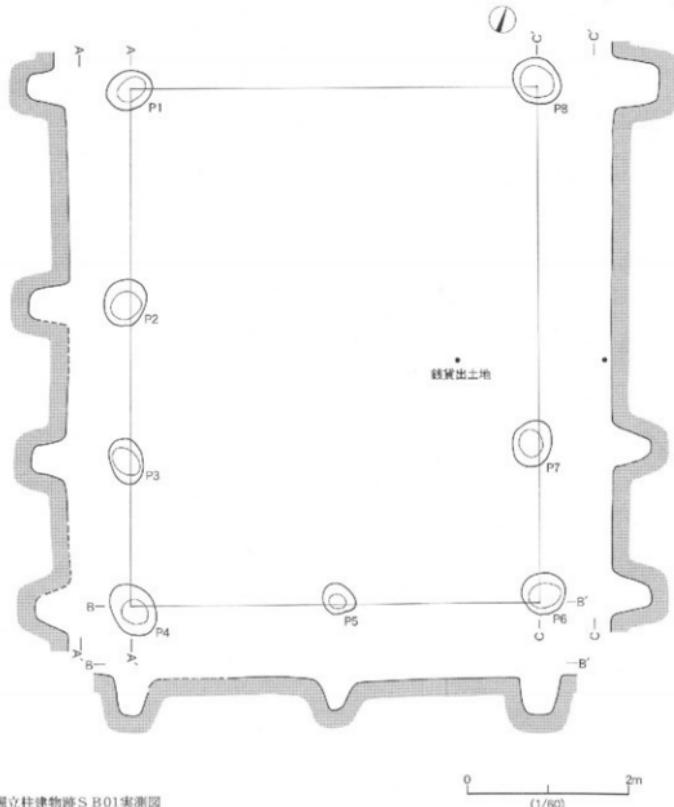
柱穴から遺物は出土していないが、柱間に銭貨4枚が検出された。本跡に伴うものと判断し、構築時期は中世に比定できる。

第4節 土坑

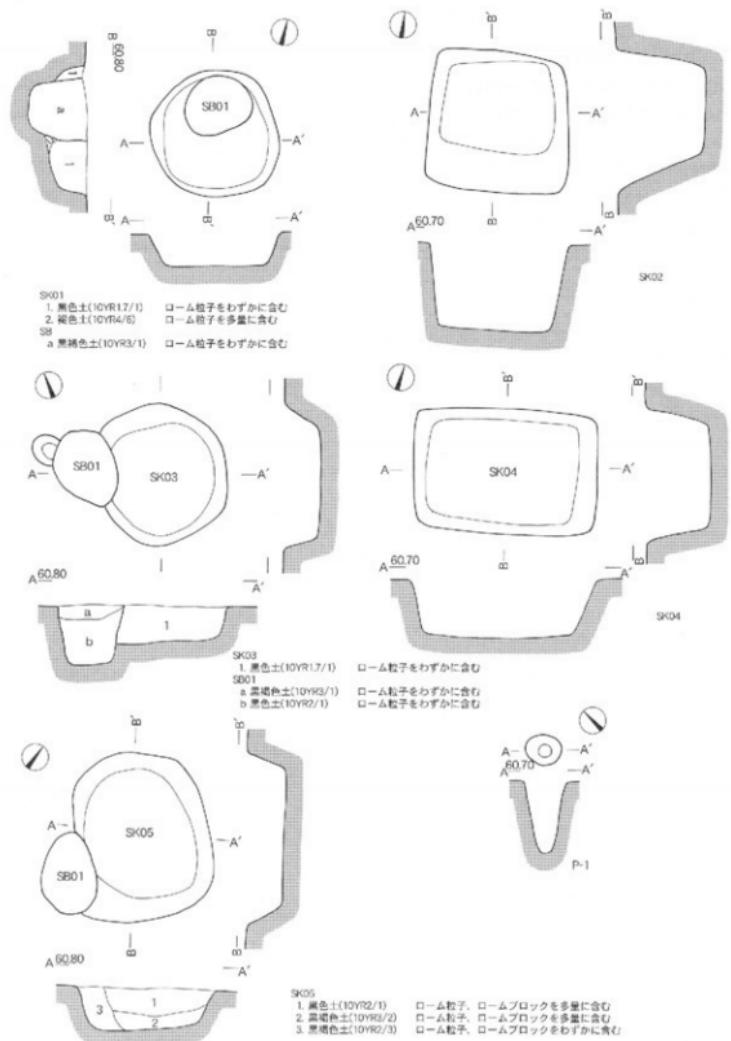
1) 土坑SK01(第6図)

調査区の北西隅に位置し、掘立柱建物跡S B01のP1に切られている。立地する標高は60.58m前後を測る。平面形は確認面で南北軸1.05m、東西軸1.00m、底面で南北軸93.0m、東西軸1.04mの隅丸方形を呈している。また検出面からの深度は最大23.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面はわずかに起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は2層に分層可能である。覆土の大半を覆っている1層黒褐色土(10YR 1.7/1)は少量のローム粒子を含み、繊りがなく、粘性に欠ける。下層で底面に堆積している2層褐色土(10YR 4/6)は多量のローム粒子を含み、繊りがなく、粘性に欠ける。出土遺物は土師器・甕胴部破片が覆土から出土した。器形等は不明であるが、外面はヘラ



第5図 掘立柱建物跡S B01実測図



ナデ、内面ヘラナデ成形され、胎土に石英・長石粒を含み、焼成は良好で、色調は暗赤褐色(5 YR 3/2)を呈する。遺物は古代であり、構築時期は覆土の状況からみても9世紀前後と推定される。

2) 土坑SK02 (第6図)

調査区の北西側に位置し、土坑SK01に隣接する。立地する標高は60.58m前後を測る。平面形は確認面で南北軸1.115m、東西軸1.11m、底面で南北軸0.72m、東西軸0.91mの方形を呈している。主軸方位はN-02°-Wを指す。また検出面からの深度は最大72.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の單一層である。多量のローム粒子・ロームブロックを含み、繊りがなく、粘性に欠ける。

遺物は検出できなかった。覆土の繊りがない土層状況から判断して、耕作用のいわゆる芋穴と判断でき近世以降と推定される。

3) 土坑SK03 (第6図)

調査区の中央西側に位置し、掘立柱建物跡SB01のP2に切られている。立地する標高は60.58m前後を測る。平面形は確認面で南北軸1.11m、東西軸1.10m、底面で南北軸0.85m、東西軸0.91mの円形を呈している。また検出面からの深度は最大29.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面はわずかに起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。検出された覆土は単一層の黒褐色土(10 YR 2/2)で、少量のローム粒子を含み、繊りがなく、粘性に欠ける。

遺物は検出できなかったが、覆土の状態から判断して土坑SK01と同じ古代と推定される。

4) 土坑SK04 (第6図)

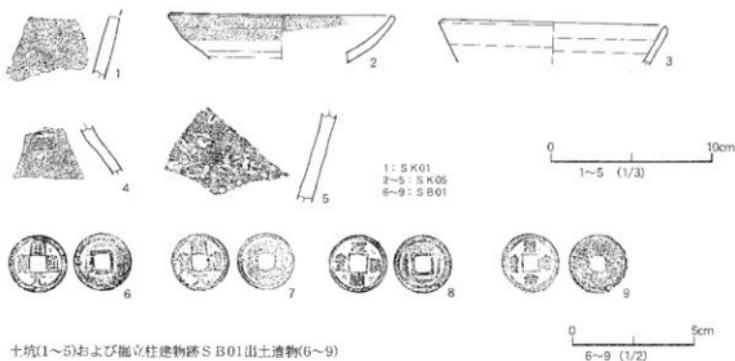
調査区の中央やや南西側に位置し、立地する標高は60.60m前後を測る。平面形は確認面で南北軸1.025m、東西軸1.50m、底面で南北軸0.84m、東西軸1.22mの東西に長い長方形を呈している。主軸方位はN-70°-Eを指す。また検出面からの深度は最大42.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。検出された覆土は単一層の黒色土(10 YR 2/1)で、少量のローム粒子を含み、繊りがなく、粘性に欠ける。

遺物は検出できなかった。覆土の繊りがない土層状況から判断して、耕作用のいわゆる芋穴と判断でき近世以降と推定される。

5) 土坑SK05 (第6図)

調査区の南西側に位置し、掘立柱建物跡SB01のP4を切って構築している。立地する標高は60.61m前後を測る。平面形は確認面で南北軸1.40m、東西軸1.115m、底面で南北軸1.04m、東西軸0.92mの南北方向に長い梢円形を呈している。主軸方位はN-34°-Wを指す。また検出面からの深度は最大20.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。覆土は3層に分層可能である。壁際の1層黒褐色土(10 YR 2/3)は多量のローム粒子とロームブロックを含み、繊りがなく、粘性に欠ける。上層の2層黒色土(10 YR 2/1)は少量のローム粒子とロームブロックを含み、繊りがなく、粘性に欠ける。下層の3層黒褐色土(10 YR 3/2)は少量のローム粒子とロームブロックを含み、繊りがなく、粘性に欠ける。

出土遺物は瀬戸美濃系・灰釉皿の口縁部破片、土師器・壺口縁部破片、須恵器・甕肩部破片、土師器・甕胴部破片が覆土から出土した。第7図2は灰釉皿の口縁部破片、推定口径14.0cmで口縁部内外面に灰釉が掛かり、灰色を呈する。近世18世紀代に比定される。3は土師器・壺類の口縁部破片。口クロ成形で、内面は黒色処理が施されている。胎土は石英・長石粒を含む。焼成は良好で外面は浅黄橙色(7.5 YR 8/6)を呈する。古代。4は須恵器・



第7図 土坑(1~5)および掘立柱建物跡SB01出土遺物(6~9)

甕の肩部付近の破片。ロクロ成形で、胎土に石英・長石粒を含み、焼成は良好である。色調は灰色(N 6/)を呈する。5は土師器・甕の胴部破片。外面ヘラナデ、内面ヘラナデで成形されている。胎土は石英・長石粒を含む。焼成は良好で、色調は黄橙色(7.5 YR 8/8)を呈する。

須恵器・土師器はいずれも9世紀代を示すが、灰釉皿は18世紀代の瀬戸美濃系陶器であり、本跡は近世の構築と推定される。

第5節 柱穴状遺構（ピット）

1) 柱穴状遺構P1（第6図）

調査区の南西隅に位置し、掘立柱建物跡SB01の南西対角線上に穿ってある。立地する標高は60.60m前後を測る。平面形は確認面で径23.0×31.0cmの楕円形を呈し、検出面からの深度は60.0cmを測る。また柱根および底面には柱根痕は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒子を含み、締りがなく、粘性に欠ける。

遺物は検出できなかった。覆土の締りがない土層状況から判断して、近世以降と推定される。

(小川和博)

第Ⅲ章　まとめ

今回調査対象となった鷹巣原遺跡は、久慈川と市中央を流れる玉川に挟まれた大宮台地の標高60m前後の一帯に立地する。南北に細長く延びた舌状台地の一角で調査範囲は限られたものであったが、中世の掘立柱建物跡1棟と古代、近世および近世以降の土坑5基、柱穴状遺構（ピット）1本が検出された。遺物としては掘立柱建物跡内から銭貨（中国錢）、土坑2基（SK01・05）から小破片であるが陶器・土器類が検出されている。

さて、本調査区の南西側はかつて「鷹巣遺跡」として昭和56年、61年の2回大規模調査が実施され、奈良・平安時代の窪穴住居跡32軒、掘立柱建物跡2棟が検出され、隣接して瓦窯跡が確認されており、とくに9世紀代における県北の代表遺跡のひとつである。しかし、ここからわずか百メートルの今回の調査地点は台地縁辺部にあたり、集落跡の東端限界の確認ができるものと期待された。確かに中世と推定される掘立柱建物跡は検出できたものの、平安時代の集落跡の限界を直接示す資料には恵まれなかった。

そこでここではまとめとして掘立柱建物跡SB01について触れたい。すでに昭和56年調査の鷹巣遺跡第1次調査でも柱間数1間×2間、2間×3間の2棟の掘立柱建物跡が検出されている。遺物は上鍤1点のみで正確な時期を確定できないが、周辺住居跡から古代と推定している。今回検出された建物跡は調査区のほぼ全体を範囲する柱間数2間×3間の南北棟である。あいにく東側の桁行列と北側の梁行列でそれぞれ1木ずつ柱穴が検出できなかっため完全ではないが、 $6.84 \times 5.60\text{m}$ の規模で平面積が 38m^2 を測る中型の長方形建物跡である。そして構築時期は古代ではなく中世と報文内で触れた。その根拠として建物跡中央東側で3種4枚の銅錢が重ねて出土からである。いずれも中国錢である北宋錢で、開元通寶2枚と元祐通寶・聖宋元寶の各1枚である。当初六道錢として墓壙に伴うものとみていたが、墓壙としての明確な彫形ではなく、人骨をはじめ副葬品等の痕跡は確認できず、墓壙という明確な彫形ではなく、浅く簡単な痕み程度の穴を穿ち人為的に重ねて置かれたものと判断した。この推定が妥当であるとすれば本跡の建築に觸わり行為であり、古代から行われていた「地鎮」に伴う銭貨の埋納行為の結果とみたのである。そのため建物の時期も中世と推定した。

大規模に展開された古代の集落跡に隣接する区域にも関わらず、これらの底は土坑内から出土したわずかな土師器・須恵器の小破片のみであった。古代における居住空間ではなかった本調査区の土地利用について改めて検討する必要がある。また台地上に展開された新たな中世遺構や遺物についても今後の課題としておきたい。

（小川和博）

参考文献

- 伊藤重敏1983「常陸鷹巣遺跡(第1次調査)」大宮町教育委員会
- 外山泰久1985「常陸源氏平」大宮町教育委員会
- 阿久津久他1995「大宮の考古遺物」大宮町歴史民俗資料館
- 井上義安1987「常陸鷹巣遺跡－第2次発掘調査報告－」大宮町教育委員会

写 真 図 版



遺跡遠景



調査区終了全景



基本層序 (P G1)



掘立柱建物跡 S B01全景



掘立柱建物跡 S B01全景



掘立柱建物跡 S B01-P2 (左)
土坑 S K03 (右) セクション



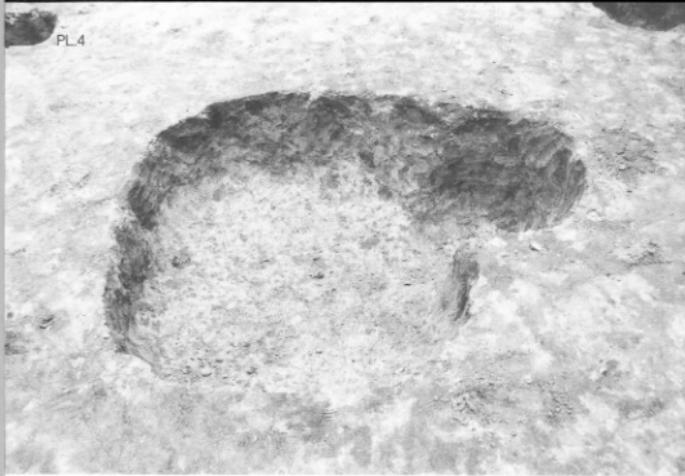
土坑SK01(上)、SK02(下)
全景



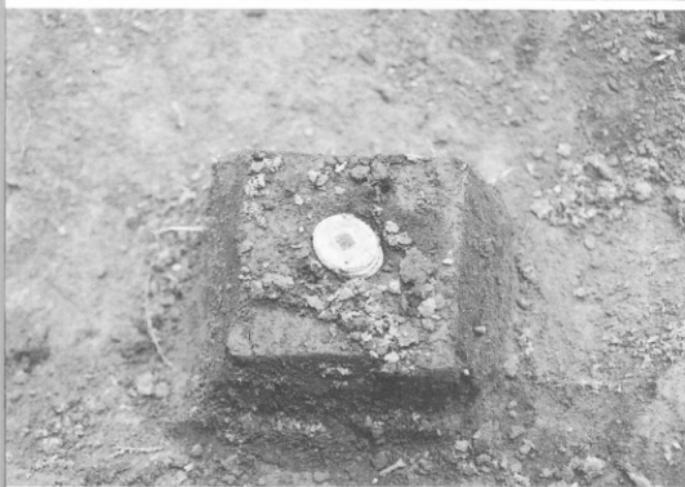
土坑SK03全景



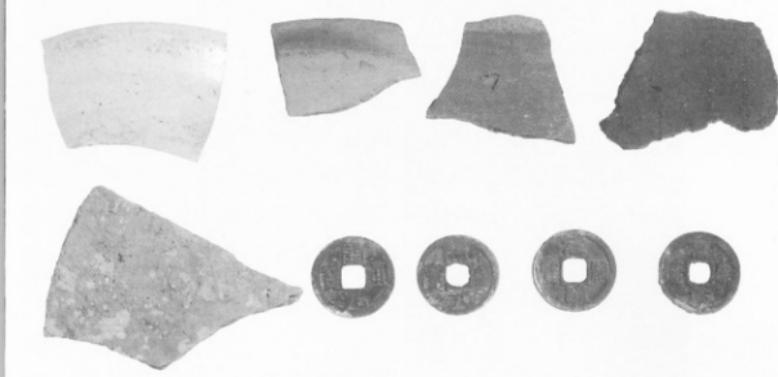
土坑SK04全景



土坑 S K05全景



権立柱建物跡 S B01
銭貨出土状況



土坑 S K01・05および権立柱建物跡 S B01出土遺物

報告書抄録

ふりがな	たかすはらいせき はっくつちょうさはうこくしょ								
書名	鹿児島県遺跡 発掘調査報告書								
副書名									
卷次									
編著者名	小川和博・大庭淳志								
編集機関	有限会社 日考研歴城								
所在地	〒300-0508 水城県糸敷市佐倉3321-1 TEL.029-892-1112								
発行機関	常陸大宮市教育委員会								
所在地	〒319-2292 美城県常陸大宮市中宮町3135-6 TEL.0295-52-1111								
発行年月日	2007年3月31日								
ふりがな 収録遺跡	ふりがな 所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村			遺跡番号						
じかく くわんじゆ いこま 鹿児島県遺跡 常陸大宮市 なかす おぎ いこま 鹿児島字原 1363-1	344	010	36度 33分 46秒 8	140度 23分 24秒 6	2006.06.01 ~ 2006.06.06	72m ²	鐵塔建設に伴う記録 保存調査		
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
鷹巣原遺跡	集落跡	古代・中世・近世	掘立柱建物跡 土坑 柱穴状遺構	1棟 5基 1基	土師器・須恵器・陶器・鉄貨			中世の掘立柱建物跡1棟が検出され、地盤に使用されたと思われる鉄貨が出土している。	

常陸大宮市鷹巣原遺跡

発行日 平成19年（2007）3月31日

編集 有限会社 日考研茨城
茨城県稲敷市佐倉3321-1 TEL 029-892-1112

発行 常陸大宮市教育委員会
茨城県常陸大宮市中富町3135-6 TEL 0295-52 1111

印刷 有限会社 田辺印刷
茨城県稲敷市佐倉3321-5